

清水教好君の遺稿について

桂島 宣弘

本別冊には、日本思想史研究会元代表であった故清水教好君の遺稿七編を収録した。清水君のまとまった業績としては、このほかに『立命館百年史』第一巻の執筆箇所などがあるが、かれの専門領域とは異なるので割愛した。

みるごとく、清水君は一九八八年に最初の論文を発表してから、亡くなるまでの二十年弱の間に七本の論文を世に送り出している。本数としては、思想史学が一般的に量産しにくいジャンルであることを加味しても、それほど多いとはいえない。やはり、一九九六年に病気となり、その後は何度か闘病生活を余儀なくされたことが関係しているといわざるをえない。

これら七本を現在通読してみると、研究者を志した学部四回生の時点で既に鮮明な課題がかれの内に宿り、それによって研究が導かれていったことが理解できる。すなわち、折しも昭和天皇の死期が間近に迫っていた一九八〇年代後半、にわかに喧噪となり、かつ醜く表層に露出した国民統合装置としての天皇制イデオロギーを目撃したことで、その徳川時代に遡っての思想史的研究こそが、若き清水君の課題としてくっきりと刻みこまれたのだ。周知のように、当時さまざまな天皇論が巷に登場していたが、多分に政治史・経済史的側面に偏っていたそれらの研究では、それを受容してしまう国民統合イデオロギーとしての側面が解明できていないとかれはみた。天皇制イデオロギーとは何か、そしてそれが国民統合の核として登場するのにはいかなる事由があるのか、さらに近代以降に何故それらは有効に作用し、かの侵略戦争に帰結したのか。こうした正統派的ではあっても難解な課題にかれは立ち向かっていったのである。「日本史研究とは天皇制研究のことである」といって憚らなかった、この意味では未だ講座派マルクス主義が影を落としていた当時の立命館大学日本史研究室の空気も、かれにとっては追い風となっただろう。もっとも、かれはこの当時から、フォーコーヤルカーチ、フランクフルト学派の議論などに親しんでいて、講座派マルクス主義には批判的スタンスをとっていたのだが。

そのかれが最初の研究テーマとしたのは、後期水戸学の思想史的研究であった。それ自体は、戦前来の蓄積のあるジャンルであり、最初から多くの先行研究と格闘しなければならないテーマをかれは選択してしまったわけだ。だが、これは最後まで一貫したかれの研究姿勢といってよいが、全ての先行研究のリストを完璧に作成し、それを集め、批判的に分析することにかれは貪欲だった。その脚註における執拗なまでの先行研究への言及をみよ。かれの論文は脚注こそが役立つと皮肉られたくらいだった。そして、本人は無論こうした評価には苦虫をつぶした顔をしていたが、それでも漏れた研究を指摘されるよりはまだましな表情だったといってよい。しかも、実はこれは何も恥ずべきことではない。脚註が役立つ論文とは、堅実な研究の代名詞でもあるのだから。さらに後期水戸学といえ、その思想的単純さとは対照的に、系譜や影響などを検討しようとするならば、実は儒学・国学・洋学といった徳川時代のほぼ全ての思想に通じなければならない大変やっかいなテーマである。天皇制イデオロギーとの関連ということであれば、近代思想史にも通じておかなければならない。そして、その後の清水君の研究は、それを文字どおり実践するものとなったのだ。この意味では、最初に後期水戸学を選択したかれの思想史家としてのセンスは、やはり卓抜したものだったとわたくしは思う。

以下、かれの研究軌跡を本別冊収録論文との関連で簡単にスケッチするならば、初めて近代天皇制イデオロギーの前提としての後期水戸学の政治思想の特質を明らかにした「第一章」はかれの卒業論文を元としたもので、わたくしにいわせればかれの生涯の「基本テーゼ」となった論文である。ここで、かれは後期水戸学への徂徠学の影響を指摘した尾藤正英氏の研究、すなわち遠山茂樹氏の水戸学＝朱子学的大義名分論というそれまでの通説を打破した当時は画期的と評されていた研究を前提に、衣笠安喜先生や辻本雅史氏の寛政期正学派朱子学の研究を踏まえ、徂徠学－寛政期朱子学－後期水戸学という系譜に着目した。そればかりではない。この系譜からは「政教一致」イデオロギーの系譜が導出されるのに対して、国学の「祭政一致」イデオロギーの影響もそこに含むことで、「祭政教一致」イデオロギーこそが後期水戸学の特質であるという見通しに到達したのである。同時に、これによって儒学的愚民観が克服され、かくて民衆の主体性を喚起するものとしての近代天皇制イデオロギーへの道筋が開かれるという展望が示されたのである。この論文は、確かに論証の精度としては未だしという感もあろうが、今でも十分に検討に値する「基本テーゼ」となっていると、わたくしは思う。

「第一章」では簡単に言及されていたに過ぎない松平定信の思想を緻密に検討したのが「第二章」「第三章」である。実は「第一章」において、「内憂外患」が後期水戸学の背景とされており、それ自体は通説的理解であることはいうまでもないが、さらにその最初の段階として寛政期儒学を捉え直そうとした点に清水君の慧眼があった。のちに藤田覚氏の一連の研究が登場し、天明～寛政期を幕末維新时期への最初の前史として捉えることは今では通説化した観があるが、清水君がこれらの論考を執筆・公表している時期はまさに藤田氏の論考が発表されつつある時期と重なっていた。「第三章」では藤田氏の研究がかなり参照されているようだが、藤田氏の著『松平定信』（中公新書）はその脱稿直後に刊行されたものであった。そして、この書では清水君の「第二章」が参照されていることに明らかのように、思想史の側から松平定信の思想を「内憂外患」という視座から捉え返すことは、奇しくも政治史・外交史の研究と軌を一に行われていたのだ。具体的にみるならば、「第二章」では、松平定信の「内憂外患」下での「自己神格化」意識と「皇天」観念による国家意識観の変容が取りあげられ、それが後期水戸学とどのようにつながるものなのかを明らかにしている。同時に「自己神格化」と吉田神道、東照宮信仰との関連、あるいは「天」と「皇天」が華夷思想とどのような関連に立つものであるのかなど、徳川思想全体の動向にも目配りした重厚な論考に仕上がっている。「第三章」は、「第二章」の応用編とでもいうべき論考で、定信の蝦夷地政策がその思想との関連で検討されている。それは一言に「華夷主義」から「内国主義」への転回として総括されているが、後期水戸学的な耶蘇脅威論的攘夷論とは異なった側面も認めている。松平定信の思想については、これらの清水君の論考は未だに参照されるべき重要な論考であろう。

「第四章」以下は、寛政期～後期水戸学に至る道筋に一つの見通しをえた清水君が、さらにそれを幕末儒学史全体の見直しへと展開していく途上での論考群といえる。正直いって、清水君の方法論や視点にやや迷いがあって、幾つかそれまで検討課題としていた方面に研究を広げつつ、その突破口を探っていた時期の論考ではないかとわたくしは考えている。ことに「第五章」以下について特筆しておかなければならないのは、一九九六年にかれが最初に発病し、いわば闘病生活に入ってからそれらが書かれたということである。方

法をめぐるかれの迷いについては後述するが、肉体的にもかれは厳しい状況下で研究を行うこととなったのである。

「第四章」は、古賀侗庵の思想を検討したもの。最初に丸山真男以来の方法から徳川思想史研究が大きく地殻変動を起こしつつあることが言及されているが、それに対置する清水君の弁はあまり歯切れよくない。実は本論文は、故衣笠安喜氏のご退職記念論文集に収録されたもので、締切りが最初から決まっていた。そうした事情もあって、清水君は相当に焦りながら執筆していた。しかも取りあげたテクストの侗庵『海防臆測』は、周知のように全文漢文の版本・写本であり、清水君の苦労は並大抵のものではなかったはずだ。また、前田勉氏がその数年前に優れた論考を著していて、そのこともかれの大きなプレッシャーになっていたことが推察される。内容的には、侗庵の開国論、海防論、中国観、西洋観などが検討され、それらが朱子学的道義性・華夷思想の枠内での対外危機への対応であって、寛政期朱子学に胚胎していたものの一つの展開であるとされている。

「第五章」は、『江戸の思想』第七号に掲載されたものだが、十九世紀学術が徳川思想をどのように記述したのかという問題について活発な議論を行っていた思想史文化理論研究会（子安宣邦氏主宰）に清水君も熱心に参加していたこともあり、恐らくそれまでとは大きく異なった視点に初めて立って書かれたものである。「和魂洋才論は…その淵源を徳川思想に求めるといのように、それらしく粉飾されて登場した言説ではなかったか」という指摘が、そのことを物語る。ここからかれは、そうした「和魂洋才論」に覆われた「東洋道徳・西洋芸術」論の再検討という課題を導出し、このことに関わる蘭学者の儒学思想のあり方や国家意識の検討に立ち向かうこととなったのである。ここでは、たとえば杉田玄白のそれが徂徠学的であるよりも古義学的であるとするなどの独創的指摘が行われているが、全般に蘭学者の国家意識が機能的華夷論の枠内で醸成されていたという指摘はやや消化不良的な感もある。「ようやく、われわれは『東洋道徳・西洋芸術』的言説を論ずる入口に差しかかったのである」という最後の言葉は、多分清水君の本音であったのではあるまいか。そして、こののち清水君の病状は悪化し、二度にわたる入院を余儀なくされる。五年にわたって論文が公刊されなかったことはそうした事情によるものである。

「第六章」の論文は、衣笠安喜氏が急逝し、その追悼論文集に収められるものとして執筆が進められていたものである。だが清水君は二度目の入院中のさなかで、このため「上」のみが掲載され、「下」は一年後に掲載されることとなったのだが、今回は合体して収録した。衣笠氏の追悼論文集に半分でも掲載できたのは、専門の近かった石黒衛氏が、清水君の衣笠先生への熱い想いに感じ入り、半分なりの論文形式に仕上げることに協力したことも与っていることは特筆しておかねばなるまい。そして、実はこの論文には、清水君なりの十年あまりに及ぶ逡巡から脱する一つの方向性が示されている点が注目される。すなわち、東アジア儒教文化圏のなかに徳川思想を位置づけていこうとする方向性である。恐らくは、澤井啓一氏や残念ながらのちに急逝された荻生茂博氏の研究がかれに強い示唆を与えていたとわたくしは推測している。そして、自らの研究をその方向性へ向かわせるために、かれは「明末清初思想」の検討から、しかも『楞嚴經』などの大乘仏典に遡っての検討を行おうというのだ。この論文の「一」における整理は、そうしたかれの文字どおり最初に遡っての検討が刻み込まれた貴重な過程を鮮明に物語るものとなっている。十八世紀後期の徳川思想とは、こうした「明末清初思想」の、ことに「儒仏調和論」に基づく西

学摂取、「気質性一元論による後天的営為の拡充論」の影響下にあったというのがかれの主張である。かくて、佐藤一斎の思想をしてみると、その特質はかれにはまさしくこうした「明末清初思想」の諸特質と完全に一致するものと捉えられた。ここでの議論は、無論今後の検討に委ねられるべきことも多く、未だ習作的な側面も目立つといわざるをえないが、それでも『楞嚴経』が十九世紀以後の日本でも流行していたことを説明する上でも参照すべき指摘であると、わたくしは思う。なお、この論文は、かれの呼びかけで始められた『天経或問』研究会でのテクスト講読会が多分に与っていると伝え聞いている。それはまた、難解な漢文史料を一言一句丁寧に読んでいく研究会であり、多くの参加者にとって大変勉強になった場であった、と。

「第七章」は、文字どおりかれの絶筆となったもので、亡くなる直前に公刊されたものである。この抜き刷りをかれから受け取ったことが、かれとの最期の出会いになった者も多いはずである。あるいは、急逝の後に郵送されてきたケースもあったと伝え聞いている。ここでは、尾藤二洲の思想が俎上にあげられ、前章以来の「明末清初思想」との関連が説かれる。同時に、その影響下での変容こそが、たとえば「理」に代わっての「忠孝」を「定準」とする「武家社会の朱子学としての日本朱子学」の成立、さらには西洋の「折衷」という寛政期以降の儒学の特性を規定したというのが、かれの結論である。ところで、興味深く感じたのは、本来はかれの「第一章」以来の「基本テーゼ」自体が、かれの「明末清初思想」との関連という新視点を考えるならば、「一国史的発展」以外の何者でもないものとして自己批判されるのかと思いきや、どうやらこの「第七章」の論理のベースにもそれは強く伏在していることだ。「忠孝」の国家構想、宗教性の強い国体論を説く後期水戸学などは、実はこうした寛政期儒学の展開線上にやはり位置づけられているのである。こうしてみると、実はここでかれが執拗に「日本朱子学」の自己認識のあり方にこだわり、あるいは「忠孝」の国家構想に言及していることは、これまでの松平定信や会沢安の思想研究でえた結論が、東アジア儒教文化圏においてみてもやはり多くは妥当するという強い確信を得たのではないかとわたくしには感じられたのである。換言するならば、かれはそれまでの逡巡にピリオドを打ち、さらに飛躍していくまさにその地点に立っていたということなのではないか。

このようにみてくると、かれの今後の研究課題は、「明末清初思想」との関連で、十九世紀徳川思想の全体を解釈し直すことにあったと考えるのは自然なことであろう。実は、かれの残された断簡的遺稿からもそれは窺える。たとえば、「洋学的言説の波動と儒学思想 水火二行説の歴史的な性格」と題されたノートは、徳川思想における水火論の歴史的な性格について、方以智『物理小識』や游藝『天経或問』、また趙翼『廿二史劄記』の水火論から話を起こし、曲直瀬道三、司馬江漢『和蘭天説』、佐藤信淵『鑄造化育論』などへの影響が論じられる構成になっている。既に必要史料は全て打ち込み済みなので、恐らく論理的構成を整えるならば、それは二〇〇七年度中に公にされる予定だったのではないかと。あるいは、大田錦城『梧窓漫筆』の読書ノートが残されているが、そこでも大田錦城が清儒からどのような影響を受けていたのかをいちいち引用して書きだしており、やはり寛政期儒学の動向を清儒の影響との関わりで論じようとした準備を行っていたことは明らかである。要するに、かれは、かなり明確な研究計画と見通しをもっていたにもかかわらず、急逝したということなのだ…。

清水君の思想史研究の方法は、きわめて正統派的な文献学的方法であった。あくまで漢文を中心とする原典史料を、一次史料に立ち返って辞書を引きながら丁寧に読み、その史料に語らせながら思想の内容を再構成することが基本である。そして、全先行研究を読破し、その議論を批判的に検討しながら鍛えに鍛えぬかれた解釈を史料に施し自らの議論を作成する。そこに研究者の思惑が入ることは無論、織り込みずみではあるが、それは現代的課題を抱えている研究者の厳しい鍛錬や省察が要求されている以上は、何度も修正されなければならない。とりわけ、「他流試合」を含むいくつもの研究会・学会での激しいバトルに基づいて自らの議論は、より洗練されたものに仕上げていかななければならない。そして、その洗練のためには、もう一度原典史料に立ち戻って、読み直すことから始める。以上が、清水君の研究方法である。これは、奈良大学用に作成された晩年のかれの「日本思想史 研究の手引き」から、まとめてみたものだが、わたくしはこれがどこから学びとられたものであるのかを、無論知っている。故衣笠安喜先生が何度も教え、そして立命館日本思想史学が長年伝えてきた研究方法こそが、それであったのだから。そして、人物の伝記研究も重視され、その人物の生きた場所をできるだけまわること、これにつけ加えておこう。清水君の調査好きは、この路線を忠実に実践したものにほかならない。

一九九〇年代に入って、「言語論的転回」の影響が日本思想史学にも及び、戦後日本思想史学が前提してきたグランドセオリー、とりわけ丸山真男との格闘が刻んできた多くの議論が、急速に色あせたものになっていた。言説研究、あるいは学知批判、言語学の議論が日本思想史学においても必須のものとなり、文献自体から研究者がその思想家の思想を再構成する「内部的読み」が厳しく批判されるようになった。テキストとしての文献を、思想家の思想の結晶物として捉えるのではなく、それが置かれた言説空間における、思想家自体の思惑をも超えた地平で検討することが重視されるようになった。だが、かれは確かにこうした動向に困惑していたようだが、既に早くからフーコーなどを読んでいたかれにとって、恐らく困惑はその方法自体にあったわけではない、とわたくしは思っている。推察するに、こうした議論によって、基本的な文献研究自体を軽視する風潮すら興ってきたことを、かれは危惧していたのではないか。だから、かれはまさに新しい議論の先頭に立っていた子安宣邦先生が、実は重厚かつ堅実な文献研究を前提としていたことに引かれ、どのように文献研究と新しい議論を結びつけるのか、先生から必死に学ぼうとしていたのだ。そして、東アジアのなかから徳川儒学を読み直すことこそ、かれのそうした苦心の末にたどり着いた一つの結論だったのだ、と今は思う。

最後になるが、本別冊の論考が成る過程においては、わたくしと清水君とのバトルもあったことも告白しておこう。わたくしには、「祭政一致」と「政教一致」が合流して「祭政教一致」となるというかれの水戸学理解は、さほど重要なものにはみえなかった。水戸学的自己像とそれはどう関わるのか、わたくしは確か何度もかれと論争した。そして、かれは「勝った」。とくに公刊後にそれがほめられる度に、得意な顔でわたくしをチラッとみたかれの顔を今もわたくしは忘れることができない。「皇天」だって、わたくしはさまざまな事例をだして、むしろ道教的概念ではないかとかれを批判した。かれは、それが「天」の普遍性を解体するものだと、頑なにわたくしの批判に反論し、そして水戸学の用例をほぼ全てあげた。そして、わたくしはまたしてもかれの「軍門に下った」。さらに「松平定信なんて思想家ではない」といったわたくし。当時はほとんど『宇下人言』くらいしか読んでい

なかったわたくしに、かれは先ずは定信の全部のテキスト読んでから批判しろといった。そして、これは伝えてはいないけれど、これもかれの「勝ちだった」。わたくしは、今は寛政期以降の概説講義では、必ず松平定信の思想に言及しているのだから。そして、本別冊が学界の一つの財産になることを、わたくしは確信している。かれは、迷惑げにわたくしの以上の文章も、あまり実証的ではないといって批判するかもしれないが、これだけはわたくしの確信が勝つと思っている。

(立命館大学文学部教授)